

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

## ■第5章「命」

福島第1原発事故から約2カ月が経過した5月、5、6号機の運転員

井手愛里(28はいわき市の産婦人科

病院にいた。

「産んでも大丈夫ですよ」

医師の言葉に井手は胸をなでろ

した。

妊娠初期だった3月11日、5、6

号機で勤務中に震災に遭った。翌12

日の朝に第1原発から出るよう命じ

られるまで、中央制御室にどまっ

て計器の読み取りなど事故対応に当

たった。

「子ロや事故があった時、現場に

どどまるのが運転員だ」といふから

信じてきました。『こんな夕まで』

## 新たな命



本県内の幼稚園児から福島第1、第2原発で働く東京電力社員に送られたメッセージ。2011年5月、福島第2原発(順天堂・谷川武教授提供)

# 廃炉を見届けたら

めんね』とおなかの赤ちゃんに謝り

ましたけど、事故後の対応に後悔は

なかったですね」

4月末に茨城県東海村の日本原子

力研究開発機構で詳細な被ばく線量

を測定した。外部と内部を合わせ0

・37μSだった。通常の被ばく限度

とされる年1μSの半分以下だっ

た。

「そのくらいなら全然問題ないで

す」。医師はそう言った。漠然と抱

いていた出産への不安が消えた。

原発から退避後の井手は、一人の

避難住民として過ごしていた。物資

が限られた避難生活では水分補給や

通常の食事のままならない。赤ちゃ

った特別な存在だ。

んが順調に成長しているか、毎朝の

でもあったのだ。

第1原発事故はようやく危機的状

況を脱しようとしていたがこの間

踏み入れられないうま時間過ぎ

た。

福島第2原発の職場に復帰したが、

事故収束作業が続く第1原発に足を

踏み入れられないうま時間過ぎ

た。

事故から3年、5、6号機は廃炉

となることが決まった。だが自宅に

戻れない住民はまだ約13万人もい

る。地域の復興には、第1原発の廃

炉に向けて安全で遅滞ない作業が求

められる。

「いつか第1原発に復帰して、廃

炉に向けて少しでも自分でできるこ

とがあればやりたいと思っていま

す」

それは事故を起してしまっただ

東

電社員の一人としての責任感から出

た言葉でもあった。そう話した井手

のおなかには、再び新たな命が宿

ている。(敬称略。年齢、肩書は当

時。共同通信 前田有貴子)